

---

# 風の中のピエロット

松谷ソウイチロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風の中のピエロット

### 【Nコード】

N5944B

### 【作者名】

松谷ソウイチロウ

### 【あらすじ】

肉親を亡くし、居場所を失ってしまった男の物語。

大学に受かって3年目の春。

隆は自分の居場所を失ってしまった。

寒い凍えるような冬を乗り越え、胸を膨らませた先に待ち構えていたのは

耐えられないほどの孤独だった。

彼は一人ぼっちだった。社会との接点を完全に逸していた。

自分が今部屋で死んでしまったら、発見されるのに一週間くらいかかるんだろっとなあ

と想像をして一人淋しく笑った。

風が無い日なのに、頬に当たる湿った空気は隆の背中をぞくつとさせた。

2年前のこの日、隆は胸をはずませこのキャンパスを見上げた。

澄み切った空と手を伸ばせば届きそうな入道雲が存在し、

隆はその中に吸い込まれていきそうな気がした。

ここに来れば何かが変わると本気で信じていた。

ネクタイの結び方も、スーツを着るときには短いソックスを履いてはいけないということさえ

知らなかったが、ただ新しい世界に飛び出す自分に自分が一番わくわくしていた。

人ごみに吞まれ、声を失い、いつしか心さえまともに機能しなくなるなどとは決して考えさえ

しなかった。ただ、2年という月日が彼の魂を徐々に奪い取っていた。

正門の前。流れる人の波。前後からせつつく人のいらだたしさを感じながら、隆は流されまい

とその場に踏みとどまっていた。つま先にぐつと力を入れ、重心を下半身に集中させ、ただじ

っと。じつとしていた。視線の先には大学の創設者の銅像が置かれ、その周りを草木が囲って

いた。銅像の目は隆を睨み返しているようにも見える。

後ろで詰まっていた金髪の青年が、

「早く行けよ！」

と隆の背中を肘でついた。一瞬よろっとよけ、脳の半分がぶるんとよれたような気がした。

ひしめく集団の波に吞まれ、隆の意思とは無関係に体は前に進まざるを得なかった。

押し寄せる人並み、人間が発する匂いと汗の混じったひといきれの中で、

迷い、悩み、そして苦しんでいた。

風は西。西へ向かって吹いている。

その時、雨。いや、ひょうの混じった冷たい雨が降っていた。

ピエロになりたい。

そう思った。

声を失ってでも、笑いを届けるピエロに。

自分が泣きながら、人を笑わせるピエロに。

ピエロに。ピエロになりたかった。

友達もいない。恋人もいない。そして唯一愛していた肉親を失った。

ただ、それだけのことなのに。

小説で映画で何度も経験したことなのに。

なんでこんなに悲しいのだろう。

文学も哲学も歴史も科学も全てが空虚に思えた。

そんなものは何も人間の悲しみを癒しはしない。

経済も法律も数学もマルクスだってニーチェだってフロイトだって  
全て消えてなくなれと思っ

た。

人一人救えないものについて何の意味があるのだろうか。

人が死ぬことは何でこんなに悲しいのだろう。切ないのだろう。い  
たたまれないのだろう。

その時、一筋の涙がすつと隆の頬を伝った。

隣の女の子が怪訝そうに隆の横顔を盗み見た。

そして

「どうしたんですか？」

とそつと淡いピンク色のハンカチを手渡した。

隆はその子を振り向かずに、かすめるような声で

「ありがとう。」

と言った。弱弱しい精一杯の言葉だった。

「早くしないと遅刻しますよ。」

女の子はそれでも隆を気にしていたようだったが、時計を見て慌てて駆け出していった。

スカートの下から覗くふくらはぎが、ずっとほっそりしていた。

後ろの人にかかとを思い切り見せながら走るフォームは決して陸上選手のそれではなかった。

人が死ぬときは、人に忘れられたときだというおじいさんのせりふを思い出した。

僕もいつか、あの人を忘れるのだろうか。のんびりとした日常の中で、暖かい陽気に風化され

いつかあの人を僕の中で殺すのだろうか。

そして、僕は今生きているのだろうか。

後ろでバカ騒ぎする女のグループの金切り声が耳をつんざいた。

涙は当に乾いていたが、充血したその目は必死に何かを訴えていた。

「ピエロ」

そう口に出して呟いてみた。

「ピエロ、か」

その時その日一番の風がぶわっと隆の背中を押した。

思わず一歩踏み出し、風の吹いてきたほうを振り返った。

そこには、大きく荘厳な講堂がそびえ立ち、神々しい威厳を作り出していた。

目を丸くし、その講堂の遙か先端、薄茶けた時計塔を凝視した。

長く、長い時間そうしていた。

じっと、ゆっくりと、そしてまじまじと。

時計の長短の針が重なり合い、一本の線になった。

芯の通ったまっすぐな。

あられの混じった雨はやみ、重くるしい雲間から吸い込まれそうな空が顔を覗かせた。

「ピエロか。それも悪くない。」

荘厳な講堂が、柔らかく隆を包み込んでいた。





(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

本当にいまいちな作品だと思いますが、アドバイスいただければ嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5944b/>

---

風の中のピエロット

2010年12月1日07時30分発行